

「グローバルCOEプログラム」(平成20年度採択拠点)事業結果報告書

概要

機関名	東京工芸大学	機関番号	32708	拠点番号	H13
1. 機関の代表者 (学長)	(ふりがなくローマ字) WAKAO SHINICHIRO (氏名) 若尾 真一郎				
2. 申請分野 (該当するものに○印)	F<医学系> G<数学、物理学、地球科学> H<機械、土木、建築、その他工学> I<社会科学> J<学際、複合、新領域>				
3. 拠点のプログラム名称 (英訳名)	風工学・教育研究のニューフロンティア New Frontier of Education and Research in Wind Engineering				
研究分野及びキーワード	<研究分野: 建築学>(風工学) (強風防災)(耐風設計)(地球・都市環境)(空気環境)				
4. 専攻等名	工学研究科 建築学・風工学専攻 (平成22年4月1日変更、旧名称 建築学専攻)				
5. 連携先機関名 (他の大学等と連携した取組の場合)	米国ノートルダム大学自然災害モデル研究所				
6. 事業推進担当者	計 9 名 ※他の大学等と連携した取組の場合: 拠点となる大学に所属する事業推進担当者の割合 [88.9%]				
ふりがなくローマ字 氏名	所属部局(専攻等)・職名	現在の専門 学位	役割分担 (事業実施期間中の拠点形成計画における分担事項)		
(拠点リーダー) <TAMURA YUKIO> 田村幸雄 <カリーム,アーサン> Kareem, Ahsan <OHBA MASA AKI> 大場正昭 <YOSHIE RYUICHIRO> 義江龍一郎 <MIZUTANI KUNIO> 水谷国男 <MATSUI MASAHIRO> 松井正宏 <YOSHIDA AKIHITO> 吉田昭仁 <MORITA YOSHIRO> 森田芳朗 (平成22年4月1日追加・交替) <OHKUMA TAKESHI> 大熊武司 <OHNO TAKASHI> 大野隆司 (平成22年3月31日定年に伴う辞退)	工学研究科 建築学・風工学専攻 特任教授 ノートルダム大学 土木・地質学専攻 教授 工学研究科 建築学・風工学専攻 教授 工学研究科 建築学・風工学専攻 教授 工学研究科 建築学・風工学専攻 教授 工学研究科 建築学・風工学専攻 教授 工学研究科 建築学・風工学専攻 准教授 工学研究科 建築学・風工学専攻 准教授 工学研究科 建築学・風工学専攻 客員教授 工学研究科 建築学・風工学専攻 教授	建築耐風工学 ・工学博士 構造, 流体力学 ・Ph.D 建築環境工学 ・工学博士 建築環境工学 ・博士(工学) 建築環境工学 ・学術博士 建築耐風工学 ・博士(工学) 建築耐風工学 ・博士(工学) 建築構工法 博士(工学) 建築耐風工学 ・工学博士 建築構工法 工学博士	・教育研究拠点形成の統括 ・風工学教育プログラムの構築(耐風構造) ・EVO構築に関連する技術開発 ・リモートセンシングによる被害認識手法の開発 ・風工学教育プログラムの構築(通風・換気) ・通風・換気設計法の研究開発 ・風工学教育プログラムの構築(風環境・空気汚染) ・市街地の熱・空気汚染予測・制御 ・自然通風・除湿システムの開発 ・人体周りの温熱環境解析 ・自然通風・放射涼房システムの開発 ・EVO知識データベースの構築 ・工学的竜巻シミュレータの開発 ・風応答モニタリング・ネットワークの構築とモデル化 ・各国の対風構工法の調査研究 ・屋根外装材の耐風性 ・各国の対風構工法の調査研究		

機関（連携先機関）名	東京工芸大学，ノートルダム大学
拠点のプログラム名称	風工学・教育研究のニューフロンティア
中核となる専攻等名	工学研究科 建築学・風工学専攻
事業推進担当者	（拠点リーダー）田村幸雄・特任教授 外 8名
<p>〔拠点形成の目的〕</p> <p>被害範囲が広大なこともあって自然災害による世界の経済的ロスの大半は強風事象に起因するものであり、地球温暖化や気候変動の影響も議論されるように、台風や竜巻などの強風災害は明らかに増加傾向にある。平成17年米国のハリケーンKatrina，平成20年5月に14万人もの死者を出したミャンマーのサイクロンNargis等のように、甚大な社会的損失と国家的脅威を与える激甚風災害が頻発している。中国などの経済発展に伴う急激な都市化，人口集中，エネルギー消費の増大は、全地球的な環境悪化の原因にもなっており、エネルギー消費量やCO₂の削減は人類社会全体の急務とも言える。ドバイに象徴されるように超々高層建築物や大スパン構造物の建設が続く中，人類社会の安全，地球環境保全のためには、複合学問としての風工学のグローバル性を強く認識した上で、技術の進歩を図る必要がある。本拠点は耐風構造分野での強風災害低減，通風換気分野での自然エネルギー利用による省資源化，風環境・空気汚染分野での地球環境保全のため、全地球的規模での風工学教育研究を行うものである。本拠点が唱えてきたCenter-to-centerベースの教育研究を、より積極的かつ地球的規模で促進させる。また、世界中の研究機関を統合した仮想的工学組織EVO (Engineering Virtual Organization) VORTEX- Winds (Virtual Organization for Reducing Toll of Extreme Winds)を構築し、全球的な高度教育研究システムの創出を目指す。世界全体の風工学教育研究の質の向上を図り、長寿命・循環型の都市形成，安心，安全な人類社会の実現への貢献を拠点形成目的としている。</p> <p>〔拠点形成計画及び達成状況の概要〕</p> <p>■教育研究分野と内容：耐風構造分野では、ユニバーサルな等価静的風荷重研究の発展，実建物風応答モニタリングシステム，外装材試験装置等の開発，台風や竜巻災害データベース構築や衛星画像等からの自動的被害認識手法，複数の建築物等の空力的相互干渉，ソーラーパネルなど屋上付加物の耐風設計法，仮想的工学組織VORTEX-Windsによる合理的耐風設計法の開発等が順調に進められた。通風換気分野では、自然通風エネルギーの高度利用のため，人体温熱生理モデルや通風時快適性の分析に基づく通風・換気設計法の開発，アジアパシフィック地域の気候に適合した自然通風・放射併用型除湿涼房システムの開発など，環境負荷の少ない持続型社会の実現に向けた研究が着実に実施された。風環境・空気汚染分野では、アジア諸国で深刻なヒートアイランド問題，建築物内外を汚染源とする都市空間の熱・空気汚染対策に関する研究を積極的に進め，アセスメント手法や都市形態ガイドラインの開発に貢献した。これらの成果は、国内外の基規準類の整備や新たな研究分野の展開を促進している。■拠点形成体制：研究推進の核である風工学研究センター，若手研究者等の教育，訓練を行うAPEC強風防災センター，研究成果の公表，データベースや教育コンテンツ等のWeb公開，News-letterやBulletinなど情報発信をする風工学技術情報室が有機的に連携して，教育研究を推進するとともに，米国ノートルダム大学・自然災害モデル研究所と連携して順調に拠点形成を進めた。■教育研究プログラム：国内外の著名な研究者26名を客員教授として招聘し，グローバルCOE期間中に，博士後期課程インテンシブコース（90分計170講義），国際アドバンススクール（5カ国），博士後期課程国際インターンシップ制度（計21名受入），APEC短期研修員制度（計22名受入），グローバルCOEオープンセミナー（計58講演）等を積極的に実施した。これらの教育プログラムはインターネット配信し，仮想的工学組織による革新的CI学習システムや創造的カリキュラムの形成と展開を図った。■国際的指導力の発揮：グローバルCOE期間中に，国際シンポジウム「都市・建築物へのウインド・イフェクトISWE」（3回）をはじめ，自然換気に関する国際ワークショップ，世界各地でのAPEC風関連規定調和のためのワークショップ(3回)や，等価静的風荷重に関する国際ワークショップ（6回）などを含めると，上記の風工学国際アドバンススクール（5回）等の教育プログラムを除いても，計33回の国際イベントを開催し，全世界の風工学教育研究をリードしてきた。平成21年6月には国連・国際防災戦略事務局UN/ISDRの傘下に風関連災害リスク低減のための国際グループIG-WRDRRが発足し，本拠点リーダーが議長に選出され，UN/ISDRのグローバルプラットフォームでのSpecial EventやSide Event，第4回アジア防災閣僚級会議でのPre-conference Event，バングラデシュにおける竜巻災害リスク軽減国際フォーラム，3年間にわたるバングラデシュの農村地帯でのMini-Safe Room Projectなど，直接的な防災啓発活動も積極的に実施した。平成23年7月には，拠点リーダーが国際風工学会IAWEの会長に再選されるなど，風工学分野での本拠点の国際的指導力は群を抜いており，当初の目的を十分に達成したものと自負している。</p>	

6-1. 国際的に卓越した拠点形成としての成果

国際的に卓越した教育研究拠点の形成という観点に照らしてアピールできる成果について具体的かつ明確、簡潔に記入してください。

■国際的に優れた研究成果とその世界的利用普及：本拠点は、数多くの独創的かつ実用的な研究を行い、優れた研究成果を輩出し、それらは世界的に広く利用され、普及している。◆耐風構造分野では、例えば、本拠点の提案したユニバーサルな等価静的風荷重は、基規準類での設計用風荷重のあり方を革新するもので、従来の1つの荷重効果のみを再現するガスト影響係数などの等価静的風荷重と異なり、全ての部材の最大風荷重効果を再現できる画期的な風荷重分布である。中国やヨーロッパで、多くの研究者による類似研究が始められており、新しい研究分野を創成している。また、種々の形状を持つ超々高層建築物の空力特性に関する総括的研究（45種類）は世界でも類がなく、形状変化による空気力低減のメカニズムの解明など多大な貢献が認められた。平成23年のASCE/SEI Structures Congressでは、特別にこのためのパネルディスカッションが設けられるなど、大きな注目を集めている。本拠点の多点変動風圧力の空力データベースは、世界の4大空力データベースの中でも最も充実しており、低層から高層まで合計261建物、13,599ケースを数え、世界中の多くの研究者が研究用データとして利用している。世界的な設計指針の一つである米国ASCE 7-16（次期改訂版）でも、設計での本拠点データベースの使用が明文化されることが内定し、設計面での貢献も著しい。また、本拠点での研究は、ISO4354（風荷重基準、平成21年度改訂）などの国際基準類にも多くの成果が反映され、我が国の建築基準法整備促進事業（平成20年度～平成24年度）等にも、拠点での最近の研究成果が数多く反映されており、成果の社会還元という意味でも特筆すべき貢献をしている。◆通風換気分野では、熱対流型換気モデルの開発、通風・自然換気設計最適化、通風環境と快適気流感などに関連して、国際的に注目の高い研究を推進しており、英国ノッティンガム大学、韓国釜山国立大学、豪州シドニー大学などとの共同研究が積極的に進められている。◆風環境・空気汚染分野では、非等温弱風域における熱拡散・汚染物質拡散の研究がヨーロッパCOSTワークショップ等で高く評価され、本拠点が導いたVertical Ventilation Pathの新概念が、香港都市計画局の都市通風換気アセスメントシステム都市計画ガイドライン案に反映されるなど、独創的で国際的な研究がなされている。

■研究の国際的組織化、世界的リーダーシップ：拠点リーダーは、平成19年7月から国際風工学会IAWE会長を務め、平成23年11月には会長に再任され、平成27年まで世界の風工学の教育研究を統轄、リードすることとなった。平成21年6月には、国連・国際防災戦略事務局UN/ISDR傘下の風関連災害リスク低減のための国際グループIG-WRRRの議長に就任して、強風防災をより組織的、効率的に全球的に実施するためのプラットフォームの構築と分野協調、国際協調を推進し、平成21年からのバングラデシュにおける竜巻災害リスク低減のための国際フォーラムなど、その実践において世界の風関連災害リスク低減活動をリードしている。20カ国のAPEC風工学ネットワークの組織化、米国ノートルダム大学と連携した世界主要研究機関14の参画する仮想的工学組織VORTEX-Windsの構築など、風工学の教育や研究を国際的に統括、組織化し、強い指導力を発揮している。本拠点での勉学、研究希望者は多く、グローバルCOE期間中に、研究員として9カ国、18名が研究参画し、博士後期課程学生として7カ国、24名が勉学、研究し、短期研修員や国際インターンシップとして15カ国、43名が研修し、国際アドバンストスクール(5カ国で5回開催)で9カ国、329名が学んだ。5年間で、合計実に22カ国、407名が本拠点で風工学の教育研究を経験した訳である。さらに、国際シンポジウム4件、国際ワークショップ15件、大学間等国際ワークショップ6件、その他フォーラム等8件など、合計33件の国際集会を開催するとともに、グローバルCOEオープンセミナー49件(58講演)など、研究のプロモーション、人材交流の促進など、常に世界の中心となって風工学教育研究を推進し、大きな成果を挙げた。

■世界第一級の風工学教育プログラム：総合的な風工学知識を身につけ、国際的なリーダーシップを発揮できる人材育成を目指し、平成21年度に専攻のカリキュラムが大幅に変更され、平成22年度から専攻名を建築学・風工学専攻に変え、世界で初めて風工学を専攻名に冠し、博士後期課程の入学定員も増員した。博士後期課程の講義や隔週開催の分野別研究者会議も全て英語で行われ、研究員および博士後期課程学生は、ほぼ1ヶ月に1度の割合で発表が義務づけられており、国際的に活躍するための基本的資質を磨くべく訓練される。さらに、世界最高の教育研究水準を保つため、国内外の著名な研究者26名を客員教授に招聘し、風工学インテンシブコース、グローバルCOEオープンセミナーなど幅広い教育プログラムを展開している。海外大学とのダブルディグリー制、国際インターンシップ、短期研修員などの制度もあり、多数の国々の若者が切磋琢磨する最高の教育研究環境を提供している。風工学国際アドバンストスクールは、グローバルCOE期間中に世界各国で5回開催され、講義録の一部はAdvanced Structural Wind Engineeringとして平成25年にSPRINGERから出版され、世界最先端の風工学教材を遍く世界に提供している。この風工学国際アドバンストスクールを模して、平成26年3月に台湾Tamkang大学でも全く同趣旨のイベントが開催され、風工学インテンシブコースについては、平成26年1月にマレーシアPahang大学が同様のイベントを企画するなど、国際的な大きな成果を挙げるとともに、嬉しい波及効果も表れている。

「グローバルCOEプログラム」（平成20年度採択拠点）事後評価結果

機 関 名	東京工芸大学	拠点番号	H13
申請分野	機械、土木、建築、その他工学		
拠点プログラム名称	風工学・教育研究のニューフロンティア		
中核となる専攻等名	工学研究科建築学・風工学専攻		
事業推進担当者	(拠点リーダー一名)田村 幸雄		外 8 名

◇グローバルCOEプログラム委員会における評価（公表用）

（総括評価）

設定された目的はある程度達成された。

（コメント）

大学の組織的な支援については、個性輝く特色ある研究センターを中心とする大学院づくりを目指す将来構想のもと、専攻名の変更や博士後期課程の定員増の取組などは評価できる。

拠点形成全体については、研究面で優れた成果を上げた点や平成24年度の博士後期課程修了者が大幅に増加した点などは高く評価できる。しかし、平成23、24年度の工学研究科建築学・風工学専攻における博士後期課程への入学者が2年続けて定員を下回り急激に減少している点については、今後の展望につながる対策の検討が必要である。また、多数の海外研究者を講師として招聘する形で、国際アドバンストスクール事業が海外で毎年開催された。国際的に卓越した教育研究拠点の形成というグローバルCOEプログラムの目的の解釈によっては、この事業の実施によって世界の風工学研究者・技術者に最先端の情報を提供することに拠点機関が貢献したことは評価できる。しかしながらその一方で、若手研究者や博士後期課程の学生による海外事業へのより効果的な参画は見られず、学生を積極的に海外へ派遣して能動的に国際社会で活躍できる人材に育てようとするグローバルCOEの本来の目的を十分に意識した取り組みとは異なるものであったと言わざるを得ない。

人材育成面については、国内外から多数の著名な研究者を招聘して実施した英語による講義やセミナーなどを受講した博士課程修了者に加え、ポスドク研究員あるいは短期研修員や国際インターンシップ生として招聘された多くの若手研究者達が、国内外の大学や研究機関で活躍していることは評価できる。しかし、平成23、24年度の2年間、博士後期課程への外国人留学生が皆無という状況については、その主たる原因となった大学側による積極的な留学生支援策の中断を止めて復活することや、優秀な学生を集めるためのより有効な方策の検討・実施が必要である。

研究活動面については、レフェリー付学術雑誌への発表論文数などから判断して、活発な研究活動の成果が十分にあげられ、概ね目標は達成されたものと判断できる。

今後の展望については、国際的に認知度の高い風工学の研究拠点としての基盤形成がある程度達成できたことは評価できる。一方で、様々な人材の招聘費用や雇用費用、海外連携先のノートルダム大学への連携先委託費が、本プログラムの補助金に大きく依存していた。しかし仮想的工学組織VORTEX-Windsの基本的枠組みが出来上がったことに伴い、費用負担も減少するとのことであり、今後ますます活発な教育研究拠点の事業を継続することが期待できる。

グローバルCOEプログラム平成20年度採択拠点事後評価
 評価結果に対する意見申立て及び対応について

意見申立ての内容	意見申立てに対する対応
<p>【申立て箇所】 (前略) また、多数の海外研究者を講師として招聘する形で、国際アドバンススクール事業が海外で毎年開催された。国際的に卓越した教育研究拠点の形成というグローバルCOEプログラムの目的の解釈によっては、この事業の実施によって世界の風工学研究者・技術者に最先端の情報を提供することに拠点機関が貢献したことは評価できる。<u>(A) しかしながらその一方で、若手研究者や博士後期課程の学生によるこの事業への参画は見られず、学生を積極的に海外へ派遣して能動的に国際社会で活躍できる人材に育てようとするグローバルCOEの本来の目的とは必ずしも合致しないものであったと言わざるを得ない。</u> (以下略)</p> <p>【意見及び理由】 下線 (A) について 1) 「国際アドバンススクール」は、上記のコメントにも書かれておりますように、世界の風工学者・技術者に最先端の情報を提供する極めてユニークな取り組みであります。これは、当初から本拠点形成の特徴でもあり、大きな目的として掲げてきた「世界中の風工学教育・研究レベルの向上」という主旨(採択時公表の[拠点形成の目的]参照)に沿って実施したものです。この事業に対して、申請時の審査、中間報告時の審査いずれにおいても、特に異議や留意事項の指摘はなく、上記の目的や実施方法を含めて「国際アドバンススクール」の意義は認められていたものです。それに従って、本拠点事業の主要な活動の一つとして、当初計画通りに順調に実施し、十分な成果を修めたと自負しています。計画どおりに実施しなかったというのであれば、ご批判も理</p>	<p>【対応】 以下のとおり修正する。</p> <p>(前略) また、多数の海外研究者を講師として招聘する形で、国際アドバンススクール事業が海外で毎年開催された。国際的に卓越した教育研究拠点の形成というグローバルCOEプログラムの目的の解釈によっては、この事業の実施によって世界の風工学研究者・技術者に最先端の情報を提供することに拠点機関が貢献したことは評価できる。しかしながらその一方で、若手研究者や博士後期課程の学生による<u>海外事業へのより効果的な参画は見られず、学生を積極的に海外へ派遣して能動的に国際社会で活躍できる人材に育てようとするグローバルCOEの本来の目的を十分に意識した取り組みとは異なるものであったと言わざるを得ない。</u> (以下略)</p> <p>【理由】 グローバルCOEプログラムは、日本の大学院の教育研究機能を一層充実・強化し、国際的に卓越した研究基盤の下で世界をリードする創造的な人材育成を図るため、国際的に卓越した教育研究拠点の形成を重点的に支援し、国際競争力のある大学づくりの推進を目的とする国家的事業である。また、中間評価時には、他国をサポートすることによって国際的な風工学全般の水準向上に貢献することも日本の役割であることは認めつつも、グローバルCOEプログラムの目的達成に向けて、教育プログラムを含む俯瞰的な改善を求めている。 本拠点形成計画の特徴として、「サイバーインフラを介して世界の主要な風工学教育研究機関14を強力にネットワーク化した仮想的工学組織VORTEX-Windsを構築し、種々の実験データベース、知識ベースなどを共有・補完し、全世界にある最新の知見と情報を利用でき</p>

解できますが、当初計画どおり実施したことに対してのご批判には、戸惑うばかりです。

2) 「国際アドバンストスクール」は本拠点だけでなく世界中の風工学教育・研究レベルの向上という主旨で実施しており、当然のことながら、本拠点在籍する若手研究者や博士後期課程の学生を参画させて、国際的感覚やリーダーシップを教育することが主旨ではありません。そちらの目的に対しては、後の4) に述べますように、短期研修制度での交流、博士後期課程インテンシブコース、国際会議での積極的な論文発表、全て英語での研究打合せ等々、別に多くのプログラムが実施され、成果を上げております。したがって、そもそも違う目的、主旨を持つものであり、「国際アドバンストスクール」への本拠点の若手研究者や博士後期課程学生の参画がないことを問題視されるのは、的を射ていないと考えます。

3) 「国際アドバンストスクール」は、風工学教育・研究の需要の高い地域、および耐風性向上や風環境改善の必要性が高いにもかかわらず、十分な教育・研究の機会を得にくい地域を中心に実施しました。その結果、「国際アドバンストスクール」への参加者等からの推薦により、本学への博士後期課程への入学者増加、すなわち人材発掘にも寄与しました（「4-1(2)人材育成計画」に明記）。また、現地調査の際の説明資料にも示しましたように、これはプッシュ型の拠点形成活動の一つでもあり、「国際アドバンストスクール」により、本拠点在籍者の数を遙かに超えて、国際的に極めて多くの人材育成に貢献できたというメリットもありました。

4) 在籍する博士後期課程学生や若手研究者には、事後評価報告書の人材育成計画に記載しましたとおり、新しく構築した建築学・風工学専攻のコースワークに加え、博士後期課程インテンシブコース、オープンセミナー等の特別な教育プログラムを提供しました。さらに、毎年来校する多くの短期研修者等との交流、国際会議での研究発表の機会を積極的に与え、海外の研究者との接触の機会を創出し、企業の研究機関等との共同研究等にも参加させ、キャリアパスの開発や自立のための支援も行いました。以上のような取り組みにより、世界のどの大学や研究機関においても十分に活躍できる人材、国際的なリーダーシップを発揮できる人材を創出することができました。この5年間に本拠点の輩出した若手研究者の多くが、中国、韓国、フィリピン、インド、ベトナム

の環境を構築し、提供すること；この仮想的工学組織 VORTEX-Winds は、優秀な人的資源の発掘にもきわめて有効であり、学生の流動性を向上させるツールともなる」と謳われていたことから、それまででない新しい教育研究拠点の形成がなされるものと大いに期待された経緯がある。風工学国際アドバンストスクールにおいても、このような本拠点の取り組みの素晴らしさをアピールしながら進められているものと推測・期待された。東京工芸大学で博士の学位を取得したい、あるいは教育研究に従事したいと思うきっかけとなることが期待された。しかしながら、事後評価に際して実施された現地調査で示された実績資料や質疑応答の中で初めて、中間評価時の進捗状況報告書や、事業結果報告書などの記述とは異なり、仮想的工学組織 VORTEX-Winds を構築する実質的な活動には、システム構築の技術開発を担当したノートルダム大学と知識データベース構築を担当した本拠点校に加えて若干の貢献をした中国・淡江大学のみであったこと、風工学国際アドバンストスクールの主催団体の一つにこそ本拠点校の名前が上げられてはいるものの、例えば講師約10人中事業推進担当者は2人程度であり、本教育研究拠点の取り組みの素晴らしさをアピールするものというよりは、より一般的な意味での先端風工学の現状を聴衆に講義する催し物と言えるものであることが分かった。

評価結果は、財政的援助を受けているグローバル COE プログラムという大きな枠組みの中で行われた取組みとして評価した結果を述べたものであるが、申し立てを踏まえて表現を修正する。

ム、イタリア、アメリカなどの大学等で活躍しており、国際的な人材育成の成果が十分に上がっていることから、グローバルCOEの目的に合致していると自負しております（「4-1(2)人材育成計画」に明記）。

以上、グローバルCOEに大きな共通の目標があることは当然ではありますが、どのような事柄に力点や目標を置くかについては、画一的である必要はなく、ある程度の多様性があるべきです。本拠点は、冒頭に述べましたように、計画調書の段階から、「本拠点だけでなく世界中の風工学教育・研究レベルの向上」という主旨で事業を申請し、それが認められて採択されました。その計画どおりに推進し、当初の目的をほぼ完璧に達成できたと考えています。

事後評価は、まずは、当初計画どおりに事業が推進されているかどうかについて、評価すべきであり、見直しをご一考頂きたいと考える次第であります。

【申立て箇所】

(前略)

今後の展望については、国際的に認知度の高い風工学の研究拠点としての基盤形成がある程度達成できたことは評価できる。一方で、様々な人材の招聘費用や雇用費用、(B) とりわけ海外連携先のノートルダム大学への多額の連携先委託費が、本プログラムの補助金に大きく依存していた。

(以下略)

【意見及び理由】

下線 (B) について

ノートルダム大学との連携は、申請時の計画調書に、連携の目的や主旨、共同研究内容等を明記し、それに従って事業推進に必要なきちんとした費用分担を行いました。その費用分担割合は、事業推進者として本拠点と連携校から参画している人数比 (8:1) を下回る 9:1 程度 (直接経費比) であり、決して過度なものではありません。連携する限りは大いに貢献して頂かなければならず、10%程度が過度とは全く考えておりません。また、連携校もほぼ同額を本事業での共同研究に拠出しており、両者のバランスもとれております。したがって、「多額の連携先委託費が、本プログラムの補助金に大きく依存」とあるコメントの根拠は全く理解できません。現地

【対応】

以下のとおり修正する。

(前略)

今後の展望については、国際的に認知度の高い風工学の研究拠点としての基盤形成がある程度達成できたことは評価できる。一方で、様々な人材の招聘費用や雇用費用、海外連携先のノートルダム大学への連携先委託費が、本プログラムの補助金に大きく依存していた。

(以下略)

【理由】

グローバルCOEのプログラムに対する補助金が無くなる後は、これまでにその補助金に依存して実施してきた方法では困難になるので、対策を講じるよう望む意図であるものの、額の多少については相対的なものであることから、申し立てを踏まえて修正する。

調査の際に他大学のプログラムとの比較を言われましたが、これは連携の度合い、事業推進者の人数比その他によって大きく異なるはずです。

以上、ノートルダム大学との連携に関しても、目的と事業内容を明確にして申請し、採択され、その計画に沿って粛々と事業を推進し、その成果をほぼ完璧に達成しえたと考えております。